

## 絵本講座

## 絵本の世界、手渡す楽しみ

講師：松井 るり子

（『七歳までは夢の中』著者）

広い会場のため、講座は書画カメラを使用して行われました。講師の松井先生が、様々な絵本を読み聞かせながら、その魅力を語ってくださり、輪唱やあやとり、折り紙を使った工作なども交え、その楽しい世界を体験することができました。

絵本の楽しみ方は様々だと思いますが、今日は、絵本を手渡す楽しみについてお話ししたいと思います。

♪ ひらひら落ち葉が 降ってくる  
風にあおられて また沈む

とても簡単な輪唱で、小さい子にも難しくなく、また大きい子にも幼稚ではありません。絵本にもそういったものがあります。そんな作品だったら、大人も我慢せずに子供と楽しむことができるでしょう。

本はそこにあるだけでは、ただのきれいな紙で終わってしまいます。子供にこんなに楽しいよ、と言いたがりの大人がいることで、本が生きてくるのではないのでしょうか。



## ■子供の暮らし

『森のおひめさま』シビュレ・フォン・オルファース  
／作 秦理絵子／訳 平凡社

もし自分がお姫様だったら、髪を伸ばして、嫌なことは全部家来にやらせて…、と子供の頃に考えたことがあります。でも、この絵本に出てくるお姫様は、とても地味な生活をしているんです。でも、その地味さが嫌じゃなくて、昔の私がこの絵本を読んだら、こんな生活も悪くないなって思ったと思います。

自然の親切さは、失くさなければ分かりません。そうした人間を超えた高貴なものに守られているということを知ると、眠りの中に入っていける、そういうベッドサイドブックとしても使える絵本だと思います。

『マツくんのふねふねヤッホイ！』ピーター・シス／さく BL 出版

『マツくんのトラクトラック』ピーター・シス／さく  
中川ひろたか／やく BL 出版

どんなに忙しくても、ちゃんと子供を気にかけて、子供が落ち着きのある生活ができるようにしてあげられるお母さん。子供が楽しんで片づけをして、やがて片づけも悪くないなと気づけるプロセスを自然と取ってやる。そうやって頭を使って育児をしているお母さんは素敵ですよ。さらに、この2冊には、見立て遊びとミニチュア遊びの、2つの遊びが描かれているのもすごいなあと思います。

『うさぎのおうち』マーガレット・ワイズ・ブラウン／ぶん ガース・ウィリアムズ／え 松井るり子／やく ほるぷ出版

この絵本は、拒否されることは、そうでなければ出会えない誰かや状況に出会うための道筋だと、言っている気がします。

また、この絵本の中には、たくさんの植物が描かれています。文字の中には出てこない、画家のささやかなプレゼントです。こういったところから興味を広げられるのも、絵本の良いところだと思います。

## ■ものをつくる手

『ペレのあたらしいふく』エルザ・ベスコフ／さく・え おのでらゆりこ／やく 福音館書店

ものと労力、労力と労力の交換をしていく

ことで人と人がつながれてものが出来上がり、それに携わった人たちの関係も結ばれていくというのが素敵です。貨幣経済の社会、関係やつながりが切れていく中で生きている私たちには難しいことです。

『かさの女王さま』シリル・イム・ブリッジズ／文  
ユ・テウン／絵 松井るり子／訳 セーラー出版

「あきらめる」という言葉には、「諦める」以外に、「明らめる」という漢字を使うことがあるそうです。できること・できないことを明らかにするという意味です。主人公のヌットが、自分のできることできないことを区別して、自分の好きなことをうまく続けていくのが良かったのだと思います。ものづくりをしたい子供を励ます絵本だと思います。

以前、布人形を作りたいという若いお母さんがいらっしやいました。昔、自分の母親が布人形を作って遊ばせてくれたそうです。子供が小さい時に、忙しい中でも無理をしてやってあげたことは、その子だけでなくその孫まで伝わっていくんだと思います。

『あいうえおはよう』『ぼくたち1ばんすきなもの』  
西巻茅子／作・絵 こぐま社

『あいうえおはよう』はことばあそび、『ぼくたち1ばんすきなもの』はかずあそびの絵本です。こうじゃないといけないという必然性が全然ないところがこの絵本の楽しいところです。この絵本を見ていると、自分も刺繍をやってみたいなあという気持ちになります。

#### ■守られている子供

『おやすみなさいをするまえに』『みんなであな  
たをまっていた』ジリアン・シールズ／文 アンナ・  
カリー／絵 松井るり子／訳 ほるぷ出版

ポーリーちゃんは、家族の多い赤ちゃんをうらやましいと思いつつも、最後に自分のお人形をあげる優しさをもっています。それは文章の中には表れてこないのですが、絵の中にはちゃんと描かれていて面白いなあと思います。

#### ■機嫌のよい毎日

『くまのコールテンくん』ドン・フリーマン／さく ま  
つおかきょうこ／やく 偕成社

絵本の中のリサの言動から、彼女がお父さんやお母さんから優しい声掛けをもらって育ってきたのだろうとうかがえますね。

『ライラはごきげんななめ』アレクサンダー・スタッ  
ドラー／作 かつらあまね／訳 セーラー出版

大人は自分で機嫌を取ることを知っていますが、子供は、発達の過程で少しずつ自分で機嫌を取る方法を学んでいきます。この絵本に出てくる大人たちのように機嫌をよくする方法を教えたり、見つける手助けをしたりするのが大人の仕事の一つかもしれません。

『くんちゃんのはじめてのがっこう』ドロシー・マリ  
ノ／さく まさきりこ／やく ペンギン社

大人たちが子供を肯定的に導く姿が、このシリーズの他の絵本にも詳しく出ていて、私にとって子育ての教科書のような絵本です。賢い大人の振る舞いは説教臭くなくて、わざとらしくなく、自然に描かれているのも素敵で、私の大好きな本です。

『ピッツァぼうや』ウィリアム・スタイグ／作 木坂  
涼／訳 セーラー出版

子供の機嫌を直す方法を、具体的に教えてくれる父親がすごいと思います。

「幸せだから機嫌がよくなるのではない。機嫌良くしていると幸せがやってくる」という言葉があります。絵本もその手助けをしてくれると思うので、皆さんも、どうかご機嫌よろしく、絵本を使って子供と遊んでみてください。自分の好きなところ、楽しいところで子供たちと楽しんでいただけたらと思います。

